

鳥沢遺跡第2次発掘調査報告書

一〇一

沼津市文化財調査報告書 第103集

鳥沢遺跡第2次発掘調査報告書

2011

沼津市教育委員会



鳥沢遺跡調査区全景





鳥沢遺跡遠景(西より)



例　言

1. 本書は沼津市原字烏澤 697 他に所在する鳥沢遺跡の発掘調査報告書である。
2. 鳥沢遺跡の発掘調査は、川祥建設株式会社による宅地分譲工事に先立ち、川祥建設株式会社から沼津市が委託を受け、平成 23 年 1 月 18 日から 3 月 4 日まで実施した。
3. 整理事業は、平成 23 年度事業として川祥建設株式会社から沼津市が委託を受け、沼津市教育委員会が担当した。
4. 発掘調査および整理事業の関係者は以下のとおりである。

事業委託者	川祥建設株式会社	代表取締役	川添義浩
事業受託者	沼津市	市長	栗原裕康
調査主体者	沼津市教育委員会	教育長	工藤達朗
事業担当者	沼津市教育委員会		
	事務局	文化振興課	
		課長	宮下義雄
		課長補佐	山口正文 (H22)・勝又恵三 (H23)
		主幹兼	
		文化財調査係長	山本恵一
調査担当者		主幹	池谷信之
		調査員	片平 剛 (パル文化財研究所)
		調査補助員	渡邊朱里 (パル文化財研究所)
			河野 悟 (パル文化財研究所)
整理担当者		主幹	池谷信之
		臨時嘱託	矢田晃代

5. 整理事業の実務は、沼津市文化財センターにおいて池谷指導のもと矢田が行った。土器の接合などの作業において、整理補助員 工藤みさ子・佐藤花奈子の補助を得た。事務処理は、事務補助員 土屋周子が担当した。
6. 遺構の測量作業は片平・渡邊・河野が担当し、デジタルデータは沼津市所有の遺跡管理システム（株式会社シン技術コンサル製）に取り込んだ。なお、遺構図の編集・図版化（紙出力）は岡部貴史が行った。土器の実測については、株式会社シン技術コンサルに土器写真測量業務として委託した。成果品により工藤が素図を作成し、トレースは Adobe Illustrator CS3 を使用して矢田が行った。
7. 報告書の編集および本文執筆は池谷と矢田が担当した。執筆分担は以下のとおりである。
第Ⅰ章第1節 池谷信之
第Ⅰ章第2節、第3節、第Ⅱ章、第Ⅲ章、第Ⅳ章 矢田晃代
8. 本書の挿図縮尺は凡例のとおりとした。
9. 本書に係わる発掘調査資料および出土遺物は、沼津市教育委員会事務局文化振興課文化財調査係(沼津市文化財センター 〒 410-0873 沼津市大諏訪 46-1 TEL 055-952-0844) で保管している。

凡 例

1. 遺構実測図の水糸高は、標高を示す。
2. 遺構配置図・平面図の方位は真北を示し、配置図中の座標は国家座標を示す。
3. 遺構・遺物の挿図縮尺は次のとおりで、その他のものについては図中にスケールで示す。
遺構 遺構配置図：1/200 住居址：1/60 竪：1/40 溝：1/60 土坑：1/60
遺物 土器：1/3
4. 遺構の略号は、次のとおりである。
S B：竪穴住居址 S D：溝状遺構 S K：土坑 P T：ピット P：柱穴
5. 土層・土器胎土の色調は、第一合成株式会社製の土色計 (SCR-1) を用いて計測し、詳細は新版標準土色帖に基づいて記載した。
6. 遺構線は次のとおり表記する。
上端：太実線 中端：中・細実線 下端：細実線 住居址床焼土範囲：破線 地山：斜線

目 次

巻頭カラー図版

例言

第Ⅰ章 調査経過

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査事業の経過	2
第3節 整理事業の経過	3

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境	4
第2節 周辺遺跡と歴史的環境	6
第3節 遺跡の層位	11

第Ⅲ章 遺構と遺物

第1節 遺構と遺物の分布	13
第2節 遺構	
(1) 住居址	13
(2) 溝状遺構	16
(3) 土坑	20
(4) ピット群	28
(5) 遺構外遺物	30
第IV章 調査の成果	31

写真図版

報告書抄録

挿図・挿表目次

第1図 遺跡位置図	5
第2図 周辺遺跡分布図	7
第3図 周辺地形図およびグリッド配置図	8
第4図 土層セクション図	9・10
第5図 遺構全体図	12
第6図 第1号住居址実測図	14
第7図 第1号住居址竪実測図	15
第8図 第1号住居址出土土器実測図	16
第9図 第1～3号溝状遺構実測図	17
第10図 第4・5号溝状遺構実測図	18
第11図 第5号溝状遺構出土土器実測図	19
第12図 土坑実測図（1）	22
第13図 土坑実測図（2）	26
第14図 ピット全体図	29
第15図 第3号ピット出土土器実測図	30
第16図 遺構外出土土器	30
第1表 出土土器観察表	30

第1章 調査経過

第1節 調査に至る経緯

原字島澤 697 他の土地（2168.67m²）には、かつて水産加工会社の工場があったが、諸事情により平成 19 年 9 月 3 日をもって、管財人の管理するところとなっていた。この土地は周知の埋蔵文化財である鳥沢遺跡の隣接地であり、その処理を円滑に進めるため埋蔵文化財の有無を明確にしておく必要があった。平成 19 年 12 月 10 日付けで管財人より沼津市教育委員会宛に提出された「埋蔵文化財分布調査指導依頼書」を受けて、沼津市文化財センターでは同年 12 月 26 日に埋蔵文化財の有無の確認のための試掘調査を行った。対象地には水産加工施設が残されていたため、これを避けながら 4 か所に試掘坑を設定し、表土を小型の重機で掘削したうえで、人力を併用しながら無遺物層となる砂層まで掘り下げた。調査の結果、そのうちの 1 か所で律令期の土師器が比較的多く出土し、周知の埋蔵文化財である鳥沢遺跡の一部であると考えられた。遺物の出土しなかった試掘坑の堆積状況などから、埋蔵文化財の分布範囲を約 1000m²と推定し、その結果を申請者宛に文書で回答した。

その後、この土地の処遇が定まらない状況が比較的長く続いたが、平成 22 年 7 月 12 日付けで新たな土地所有者であるリビング工業有限会社（沼津市柳沢 207-2 代表取締役 芹澤貞昭）より改めて「埋蔵文化財分布調査指導申請書」が提出された。同社にはこの土地を宅地として販売する計画があり、それに先立ち埋蔵文化財のより詳細な分布範囲、および深度に関する情報が必要となつたためである。そこで沼津市文化財センターでは、1 回目の試掘によって埋蔵文化財の分布範囲と推定された境界付近を中心に、さらに 4 か所の試掘坑を設定して試掘調査を実施した。今回の試掘調査では、住居址らしき落ち込みや、土坑などの遺構が検出され、埋蔵文化財の分布範囲はやや狭まって 900m²に限定された。

川祥建設株式会社（富士市伝法 3107-1 代表取締役 川添義浩）は、リビング工業有限会社よりこの土地を購入し、10 区画の宅地造成と住宅建築を計画した。この計画をうけて沼津市教育委員会と静岡県教育委員会では、開発計画と文化財保護の調整を行つたが、宅地となる区画については切り土・盛り土の量を調整することで保護層を確保し、開発対象地東側に計画されている道路部分約 300m²のみを発掘調査の対象とすることで合意を得た。これを受け同社より静岡県教育委員会宛に「埋蔵文化財発掘の届出書」が、沼津市教育委員会を経由して提出された（平成 22 年 9 月 16 日付）。

また同社より沼津市教育委員会宛に平成 22 年 9 月 8 日付けで「住宅分譲地の発掘調査の実施について（依頼）」が提出された。同社は経済情勢と不動産価格変動のリスクを避けるため、速やかな発掘調査の実施を強く求めたため、同社より発掘調査の実務全般の提供を受けて年度内に発掘調査を実施することにした。

発掘調査に係わる実務は、有限会社パル文化財研究所（静岡市清水区横砂東町 34-4 代表取締役 片平剛）を経由して受けることになり、沼津市教育委員会、川祥建設株式会社、有限会社パル文化財研究所との間で協定書を取り交わしてその方法を相互に確認した（平成 22 年 11 月 22 日）。また報告書刊行のための整理事業は、沼津市教育委員会が平成 23 年度事業として実施することについても協定書に記載した。

現地にあった水産加工施設については、こうした調整作業と並行しながら解体・撤去作業を行つた。撤去作業は建物内に残されていた冷蔵庫の処理や、奥行きの深い土地条件などのために大幅な遅れを生じた。そのため当初、平成 22 年 12 月に開始する予定であった発掘調査は、翌年 1 月にずれ込むことになった。

第2節 発掘調査事業の経過

平成23年1月18日からフェンス・重機・プレハブ・仮設トイレなどの各設備の搬入と設置を行い、1月19日に基準点の測量と器械点の設置をした。1月20日からは重機による表土除去作業が行われ、1月24日には作業員を動員しての本格的な調査に取りかかった。

調査はまず、北から南方向へ鉛筆かけを行うことから始め、その結果、溝状遺構・土坑を検出した。遺構の掘り下げは1月31日より調査区の南側に位置する遺構から開始し、次第に北側に分布する遺構へと調査対象を移していく。北側で多数の土坑・ピットなどが検出され、さらに1基の住居址が確認されている。溝状遺構・土坑・ピットの調査をほぼ終えた2月15日から住居址に着手し、3月2日に完掘している。

3月3日から重機による埋め戻しとプレハブ・仮設トイレ・機材などの搬出を行い、3月4日をもって現地の調査をすべて終了した。

遺構・遺物・土層断面などの実測作業は、隨時トータルステーションによって行い、株式会社シン技術コンサル製の遺跡管理システムによってデータベース化した。土層断面の注記については、第一合成株式会社製の土色計(SCR-1)を用いて色調を計測し、詳細は新版標準土色帖に基づいて記載している。記録写真撮影は隨時行った。



第3節 整理事業の経過

整理事業は平成23年度埋蔵文化財整理調査受託事業として行うものとして、事業者である川祥建設株式会社（代表取締役 川添義浩）と沼津市（沼津市長 栗原裕康）において平成23年5月9日付けで鳥沢遺跡埋蔵文化財整理調査委託契約を締結し、実施した。

土器の洗浄は有限会社バル文化財研究所が行い、それ以降の整理作業は沼津市教育委員会文化振興課文化財調査係が担当し、沼津市文化財センターにて実務を行った。

注記作業を行った後、土器の接合を開始した。接合後は、復元樹脂を用いて接合土器の強化、復元を行っている。接合した結果、ある程度器形が判明したものに関しては株式会社シン技術コンサルに業務委託をして、正射投影撮像装置（SIOS-1000）により等倍で画像を撮影した。この写真を実測用の下絵として用い、鉛筆による素図を作成した。その他の土器形状のよくわかる破片または特徴的な形状部の破片は、整理作業員の手実測により図化した。素図のスキャニングをした後、Adobe Illustrator CS3を利用したデジタルトレースを行った。縄文・弥生土器は小破片であったため、拓本・断面実測を一連の作業として実施した。

遺構図版作成のためのデータは、現地調査時にデジタルデータとして遺跡管理システムへ取り込んだ。このデータをもとに編集を加えて整合性を確認した後、図版用の図として使用するための編集作業を実施し、ページプリンターで印刷した図版を印刷用版下図として使用している。これらの編集作業は、株式会社シン技術コンサルの社員が担当職員の指示に従い行った。

写真図版については、現地調査時に撮影した遺構・遺物などの記録写真と、整理作業時に撮影した接合・復元された遺物の記録写真をあわせて整理し、写真図版用の版下を作成した。

以上の作業と並行して、調査日誌等の記録を基本資料として報告書原稿の執筆を行った。



第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境

鳥沢遺跡が所在する沼津市は、駿河湾に面する伊豆半島西岸の付け根に位置している。江戸時代には東海道の宿場町として栄え、その後半は沼津水野藩の城下町としても発展した。JR 東海道本線沼津駅が設けられた後は商業都市として発展を遂げており、現在は県東部の中核的な都市である。沼津市域は、北に愛鷹山、さらに富士山を望み、北部地域にはその裾野が広がる。この裾野から海の方向へは、浮島沼により形成された低湿地帯や黄瀬川扇状地堆積物による平地が存在し、海岸沿いに松の連なる千本松原が続く。また平成 17 年には戸田村が合併し、大瀬崎よりさらに南に市域が広がっている。

発掘調査の対象となった鳥沢遺跡は、沼津市域の西部原字鳥澤に所在する。JR 東海道本線原駅から西へ約 1km の距離で、旧東海道である県道東柏原沼津線と JR 東海道本線に挟まれた地点に位置する。調査地の東側には沼津第二放水路、北側には石川島運搬機械株式会社沼津工場が所在する。

本遺跡の調査範囲は長方形を呈し、軸を北東方向へ向けている。南から北へ向かって緩やかに傾斜しているが、北東部には平地が広がり、土坑など多数の構造が認められた。現在の海岸砂礫州の背後部分にあたる。本遺跡のさらに北へ向かうと緩やかに傾斜したのち、平坦になって浮島ヶ原の低地に続く。

現在の海岸線は愛鷹山の山裾から南に約 2km の位置に展開するが、かつての駿河湾の海岸線は現在よりもはるかに北方に位置し、相当の深度をもって直接愛鷹山の山裾部を洗っていたものと考えられている。これらのこととは山裾付近で行われたボーリング調査の結果、地表下 44m までは浅海泥底を示し、その中に海棲貝化石層を確認したことからも明らかである。貝類が生息するような浅い海を作り上げたのは、愛鷹山を開析する河川等が運搬する土砂や、富士川・狩野川の両河川が運搬した砂礫であり、これらが長い年月をかけて堆積した結果が現在の千本砂礫州である。

千本砂礫州は富士川河口から狩野川河口南側まで、約 22km 延びておりその大部分は風成砂により砂丘を形成している。構成する砂礫の岩質や起源により鈴川砂丘・千本砂丘・牛臥砂丘に分けられる。鈴川砂丘は富士川河口から沼津市新中川までの約 18km に及び、富士川起源の砂礫により構成される。千本砂丘は千本公園を中心に狩野川河口まで続き、牛臥砂丘は狩野川河口から牛臥山西北端までの約 700m にわたって存在する。千本砂丘・牛臥砂丘はともに狩野川起源の砂礫により構成されている。砂丘の幅は 250m ~ 1000m で、標高は平均して 10m 前後であり、東に向かうほど幅が広くなる。千本砂礫州は 3 列の砂礫州からなり立っており、砂礫州は現在の姿を呈するまでに 3 段階の過程が認められている。内陸側の古い方から順に砂礫州 I・II と呼ばれる砂礫堆が存在する。本地域の北西の傾動により浮島ヶ原の低地の下に埋没しており、現在の千本砂礫州は砂礫州 III にあたるものとされている。

千本砂礫州の発達過程はおおよそ以下のようである。浮島ヶ原地域では 9000 年前頃には海水の浸食が本格的になり、内湾の形成が始まった。9000 ~ 8000 年前は河川水の影響が強まり、陸成堆積物が著しく堆積した時期である。8000 年前に海岸水・外洋水の影響が内湾の奥まで及び、砂礫州 I を構成する海成砂礫層の堆積が始まる。7000 ~ 6000 年前に砂礫州 I の背後に位置する海域が潟湖化したが、約 6000 年前以降砂礫州 I が離水したために、背後の潟湖は沼沢地・湿地へと変化した。5000 ~ 4000 年前には砂礫州 I の海側に形成された砂礫州 II によって砂礫州 I が閉塞され、2000 年前後には現在の砂礫州の位置に砂礫州 III が形成された。

低湿地へ人間が進出した時期は、縄文時代中期にまでさかのぼる。低地の中央部の砂礫州 I 上では、雌鹿塚遺跡・雄鹿塚遺跡が人間活動の場になり、同時に下道遺跡付近の海岸部で砂礫州 II が離水し、やはり人間活動の場となっている。弥生時代後期には砂礫州 III が離水したことにより浮島ヶ原中央の湿地区の環境が安定したためか、雌鹿塚遺跡・雄鹿塚遺跡で集落の形成が認められている。古墳時代以降



第1図 遺跡位置図

になると浮島ヶ原海岸部の砂礫州Ⅱ・Ⅲ上へ人間活動の場が移動し、集落や古墳群が形成されることとなる。

第2節 周辺遺跡と歴史的環境

鳥沢遺跡の所在する千本砂礫州上には、最も古く形成されたと考えられる砂礫州Ⅰでも6000～5000年前頃に離水し陸地化したとみられることから、縄文時代中期以前の遺跡は確認されていない。

浮島ヶ原の背後に広がる愛鷹山南麓では、旧石器時代の遺物が確認された猫山遺跡・大崩遺跡・伊良宇跡・メッコ遺跡などが所在し旧石器時代から人間活動が行われていたことが認められる。愛鷹山の山裾には縄文時代から古墳時代にかけての集落跡が数多く分布する。縄文時代の遺跡としては葱川遺跡が著名であり、縄文時代中期から古墳時代中期まで継続して営まれた遺跡で、市内では発見例の少ない縄文時代晚期の遺物も検出されている。

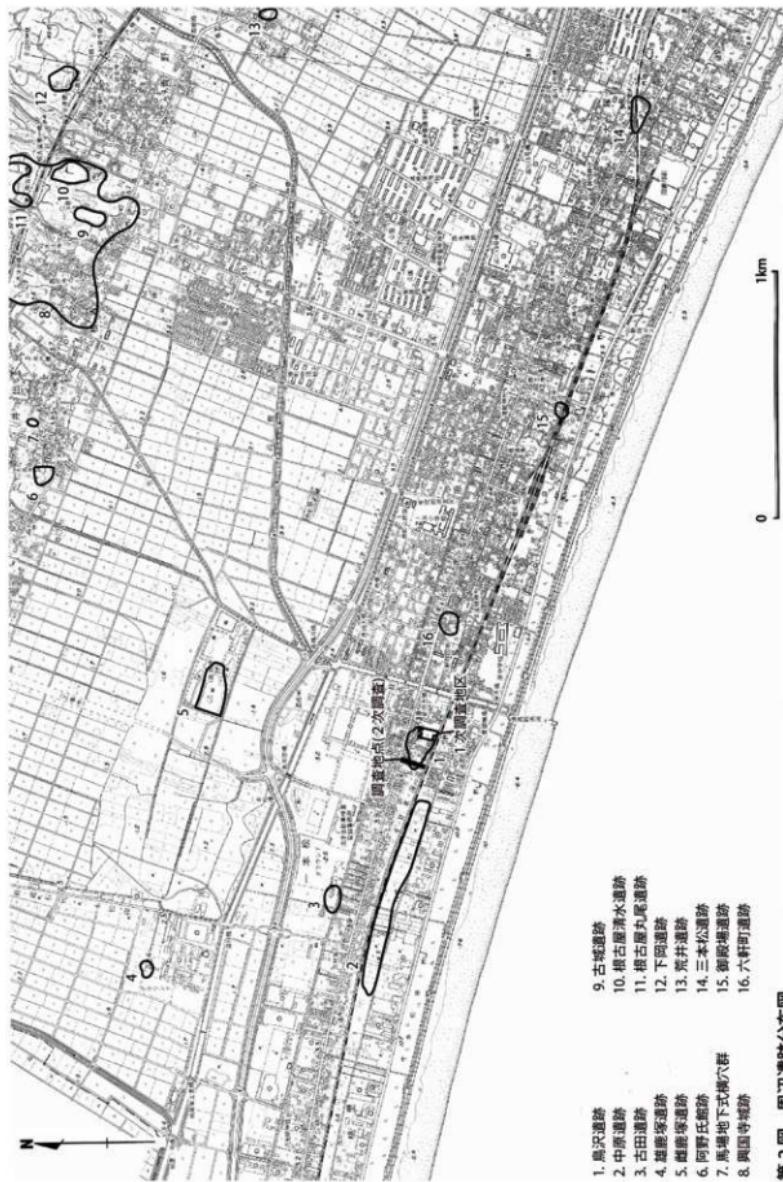
砂礫州上では雄鹿塚遺跡・雌鹿塚遺跡が確認されており、いずれも砂礫州Ⅰに起因する微高地に立地している。雌鹿塚遺跡は昭和63年に沼津市教育委員会が発掘調査を実施し、縄文時代中期から古墳時代後期に至る集落遺跡であることが判明しており、遺跡の主体となる遺構は弥生時代後期の集落跡である。低湿地であったことから農具・祭祀具を主とする多数の木製品が出土した。雄鹿塚遺跡は雌鹿塚遺跡の西方約1kmに位置し、昭和62年に沼津市教育委員会が遺跡の一部を発掘調査し、縄文時代後期から古墳時代中期にわたる集落遺跡であることが確認されている。遺跡の一部のみの調査であったため、遺跡の全容は明らかになっていないが、雌鹿塚遺跡と同様の立地および時期であることなどから類似した集落遺跡であることが予想される。

弥生時代以降も愛鷹山南麓では集落が形成されるが、弥生時代前期の遺跡は市内ではほとんど確認されていない。荒久上遺跡・古城遺跡において弥生時代中期の土器が出土し、関峰遺跡・メッコ遺跡においては市内では2点のみの出土である小銅鐸を検出している。千本砂礫州上においても弥生時代中・後期の遺跡が分布しているがその数は少なく、三本松遺跡・六軒町遺跡などが確認されているが、発掘調査は行われておらず詳細は明らかではない。三本松遺跡の付近には昭和34年に原町教育委員会により発掘調査された大塚字道上の大塚古墳があったが、すでに遺構の大半は破壊されほとんど残っていないかった。

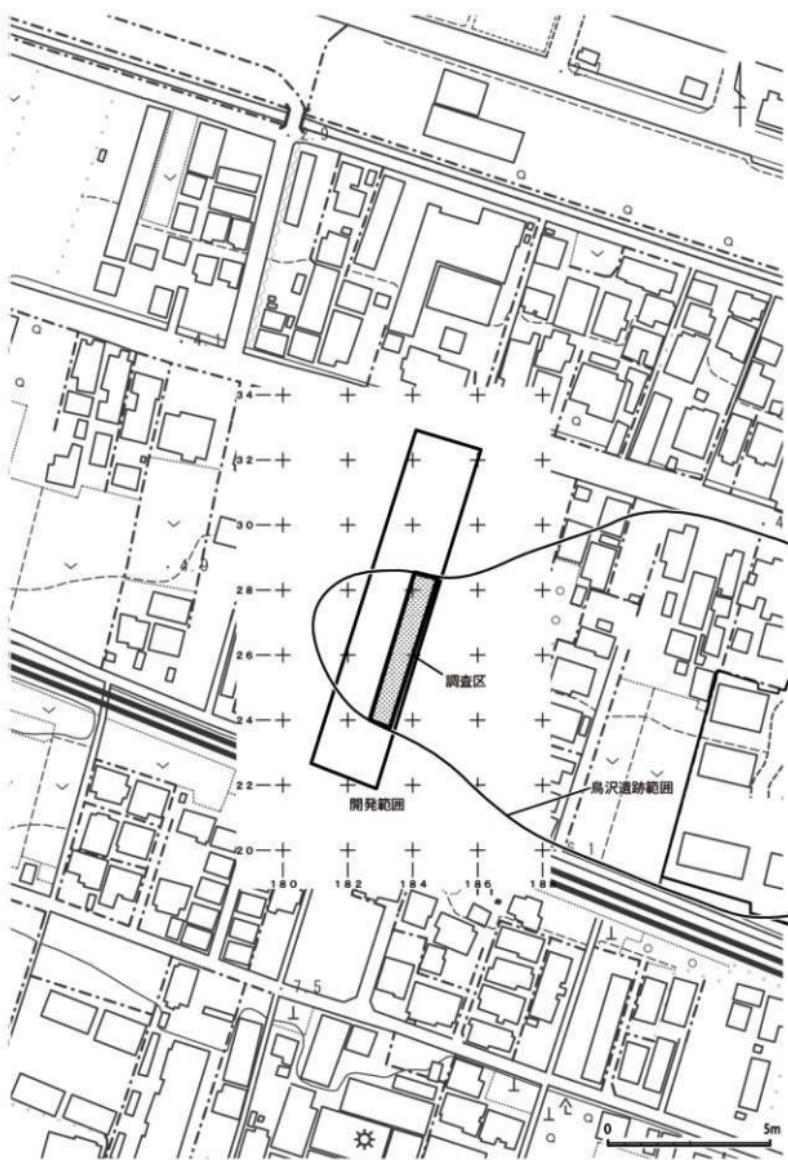
旧東海道の道筋にあたり、古代から現代に至るまで人が住み続けた土地であるということから発掘調査が行われず詳細が明らかではない遺跡もある。また宅地・農地として長い間使用されてきたことにより消滅してしまった遺跡も少なくないと考えられる。

古墳時代以降になると愛鷹山の南麓や浮島ヶ原の中央部での人間活動は縮小され、海岸地域へとその場が移動しており、砂礫州Ⅲ上に集落や古墳群などが形成されることとなる。砂礫州Ⅲ上において、下道遺跡・中原遺跡・古田遺跡・御殿場遺跡・鳥沢遺跡などが確認されているが、発掘調査が行われていないため詳細が不明な遺跡もある。さらに東へ向かうと東畠毛遺跡・松長古墳群・神明塚古墳・上ノ段遺跡が所在する。東畠毛遺跡では古墳時代後期後半から律令期にかけての遺構を確認している。その東には全長54mを測る前方後円墳の神明塚古墳が築造されており、千本砂礫州上に存在する古墳としては最大・最古のもので、また市内最古の古墳である。昭和57年の発掘調査により、主体部が粘土椁を有することが確認されている。神明塚古墳の一带は弥生時代後半から古墳時代前期にかけての集落跡である上ノ段遺跡であり、その東には松長古墳群が存在し砂礫州上に沿って群集墳が形成されていたが、すでにそのほとんどが消滅して近年では数基がかろうじて墳丘を確認できるのみである。

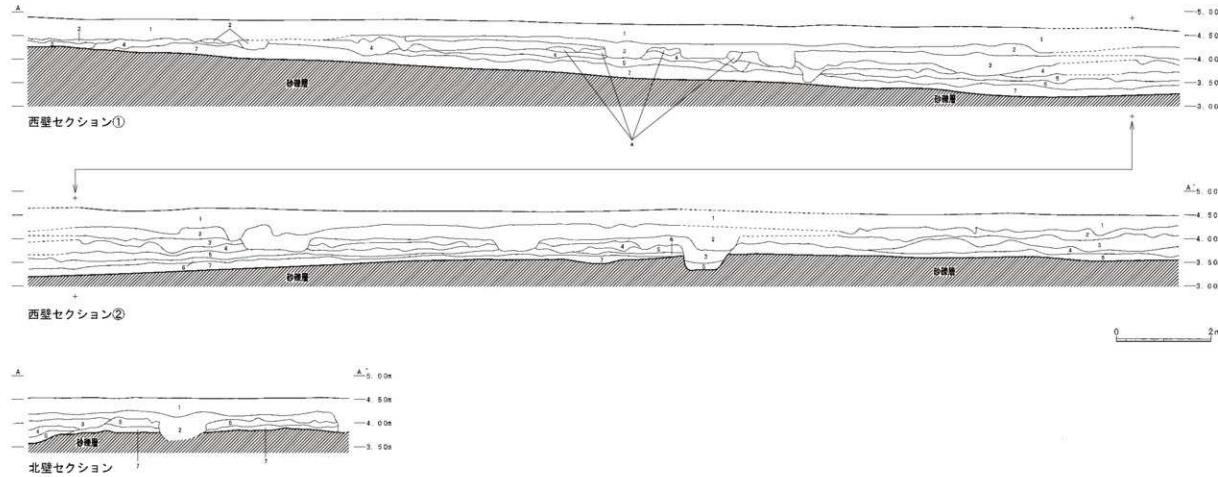
また、愛鷹山の南麓では古墳時代後期になると群集墳が形成される。開析谷に挟まれた尾根ごとに一群を成し、標高200m付近にまで分布している。古墳群は神ヶ沢古墳群・石川古墳群・川上古墳群・



第2図 周辺遺跡分布図



第3図 周辺地形図およびグリッド配置図



第4図 土層セクション図

井出古墳群・根古屋古墳群・的場古墳群・柳沢古墳群が確認されている。

第3節 遺跡の層位

鳥沢遺跡は千本砂礫州（砂礫州Ⅲ）上に立地しており標高は約3.5m～4.4mで、南から北へ向かって低くなる傾斜ではあるが、最も低い部分は調査区西側の中央付近である。調査区域は南北約48m、東西7mの長方形である。調査区の西壁と北壁で土層堆積状況を確認した。

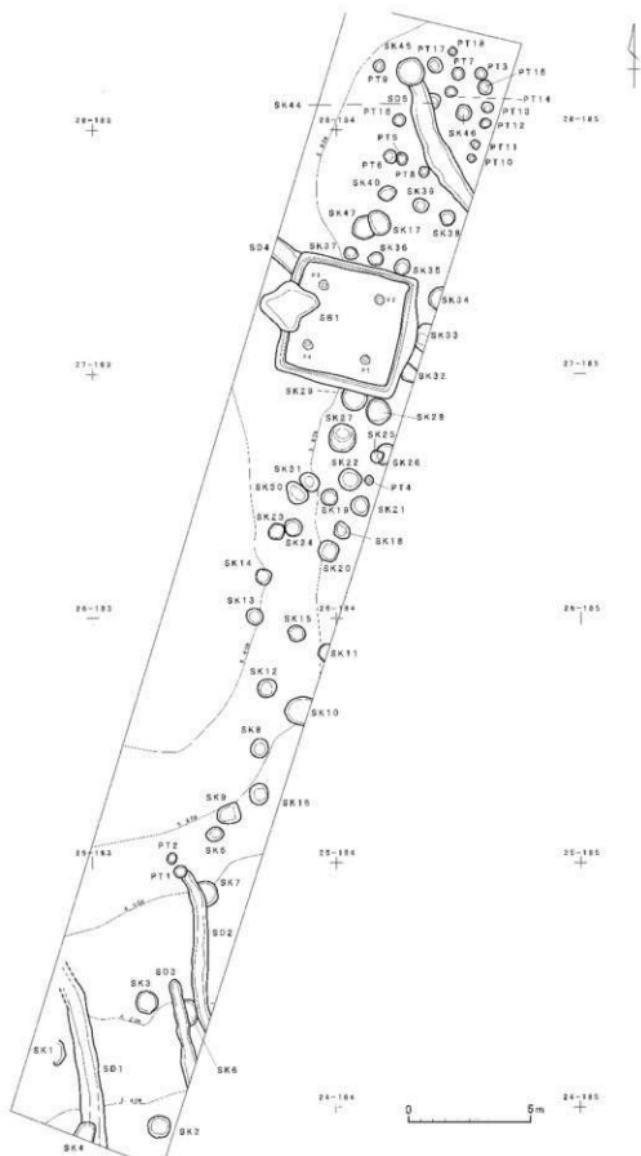
土層は8層に分層された。1層は耕作土である。2層はしまりが強く、粘りがやや強い黒褐色土（10YR2/2）で、径5mmの赤褐色（5YR4/6）スコリアを20%、径3～10mmの小礫を50%含む。3層はしまり、粘りがともにやや強い黒褐色土（10YR3/2）で、径5mmの赤褐色（5YR4/6）スコリアと径1～5mmの小礫を20%、径2～5mmの灰白色（2.5Y8/2）バミスを微量に含む。4層はしまり、粘りがともに強い黒褐色土（10YR2/2）で、径5mmの赤褐色（5YR4/6）スコリアを20%、径1～5mmの小礫を5%、径2～5mmの灰白色（2.5Y8/2）バミスを微量に含む。5層はしまりがやや強く、粘りが強い黒褐色土（10YR2/2）で、径5mmの赤褐色（5YR4/6）スコリアを20%、径1～2mmの小礫を20%含む。3層の覆土が混合しているため、バミスが若干含まれる。6層はしまり、粘りがともにやや弱い黒褐色土（10YR3/1）で、径1～5mmの小礫を30%含む。7層はしまりがやや弱く、粘りはやや強い黒褐色土（5YR2/1）で、径1～5mmの小礫を50%以上含む。砂礫層はしまり、粘りがともに弱い暗褐色土（10YR3/3）で径2～10mm前後の砂で構成されており、この層が千本砂礫州の基盤を成していると考えられる。砂礫層の上面で遺構が確認されており、やや南寄りの2～4層周辺に見られるa層は黒褐色土（7.5YR3/4）で、本遺跡の西側に広がる遺構の覆土という可能性もある。

西壁の南端部では耕作土が厚く、スコリア混入の黒褐色土層がわずかに見え、その下部には遺構確認面である砂質土層が続く。砂質土層は南から北へ向かって傾斜し、中央付近で最も低くなると再び北へ向かって高くなる。中央付近では2～7層にあたる黒褐色土層が徐々に厚くなるため、黒褐色土層の上面の高さはほとんど変わらない。中央付近から黒褐色土層と砂層の間に小礫を50%以下含む黒褐色土層が2層見られるようになる。北寄りで確認した第4号溝状遺構の断面を境に小礫を含む黒褐色土層は検出されなくなる。

北壁の西端付近では、スコリア・小礫・バミスが含まれる黒褐色土層の下部に砂質土層が認められた。その東側では小礫を30～50%含む黒褐色土層が認められ、砂質土層へと続く。

〈参考文献〉

- 松原彰子 1995『下道遺跡周辺の自然環境変遷』『下道遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書 57
- 鶴田晴徳 1995『下道遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書 57
- 鶴田晴徳 1998『鳥沢遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書 66



第5図 遺構全体図

第三章 遺構と遺物

第1節 遺構と遺物の分布

古墳時代以降の遺構として住居址1軒・溝状遺構5本・土坑44基・ピット18基を検出した。遺構は耕作土・遺物包含層となるスコリア・バミス・小礫を含む黒褐色土層の下部に位置する砂質土層上面で確認された。遺構は主に調査区の中央から北半分の地域で検出されている。調査区中央から北東側に広がるやや平地となる区域で土坑・ピットが多数確認されているが、いずれの土坑・ピットにおいても規則的な分布は認められない。住居址は調査区北側で検出され、西側に竈を備える方形の平面プランを呈する。形状と出土遺物から古墳時代後期～奈良時代の住居と考えられる。

第2節 遺構

(1) 住居址

第1号住居址（第6～8図）

【調査経過】

調査区の中央からやや北側で検出され、2月15日に着手した。2月23日にセクションベルトを残して床面まで掘り下げ、2月25日には土層断面実測を行うと壁面の内側を巡る周溝が認められた。引き続きセクションベルトを除去し、検出された竈の調査を開始した。さらに周溝の掘り下げも進め、続けて写真撮影・実測を行った。3月1日には竈を完掘し、続けて床面の精査を行ったが、柱穴を確認することが出来なかったため掘り方での検出を試みた。その結果、4本の柱穴を確認し引き続き写真撮影・実測を行い3月2日に調査が完了した。

第4号溝状遺構に西辺を、第29号土坑に南辺を、第32・33号土坑に東辺をそれぞれ切られている。

【規模】

長軸 6.40m × 短軸 5.03m

【主軸方向】

N - 76° - W

【形状】

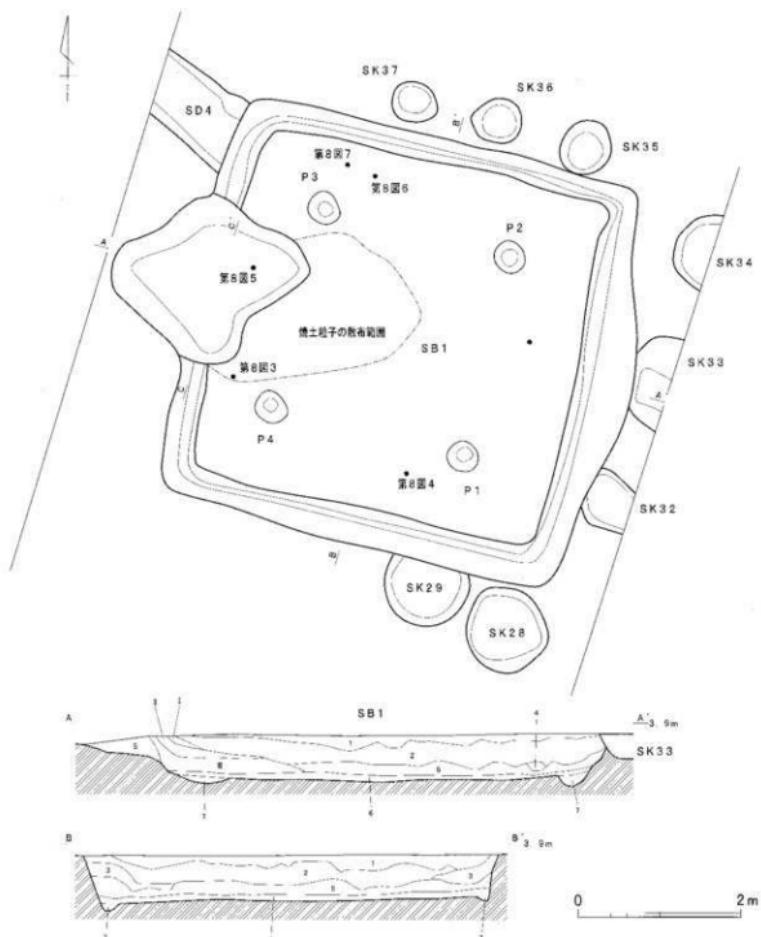
方形を呈する。東辺上端の中央部がやや張り出している。

【覆土】

1層は黒褐色土(10YR3/2)で、径5mmの赤褐色(5YR4/6)スコリア・径1～5mmの小礫を20%、径2～5mmの灰白色(2.5Y8/2)バミスを微量に含む。しまり、粘りがともにやや強い。2層は黒褐色土(10YR2/2)で、径5mmの赤褐色(5YR4/6)スコリアを5%、径1～5mmの小礫を20%、径2～5mmの灰白色(2.5Y8/2)バミスを微量に含む。しまり、粘りがともに強い。3層は黒褐色土(5YR2/1)で、径1～5mmの赤褐色(5YR4/6)スコリアを25%含み、しまり、粘りがともに強い。4層はぶい黄褐色(10YR4/3)の径2～5mmの砂質土。しまり、粘りがともにやや弱い。5層は黒褐色土(10YR3/1)で、径1～5mmの小礫を30%含み、しまり、粘りがともにやや弱い。6・7層は粘りがやや強い黒褐色土(5YR2/1)。6層は径1～2mmの小礫を50%以上含み、しまりが強い。7層は径1～5mmの小礫50%以上含み、しまりが弱い。

【壁・床】

周溝部を含めた最大壁高は73cm。周溝の幅は約20～60cm、深さは5～6cmを測り、断面は薄い皿状である。竈部分を除き全周している。竈付近から中央へ焼土粒子が広がり、その散布範囲は長径約2.7m、短径約1.7mで平面形はやや楕円形を呈する。



第6図 第1号住居址実測図

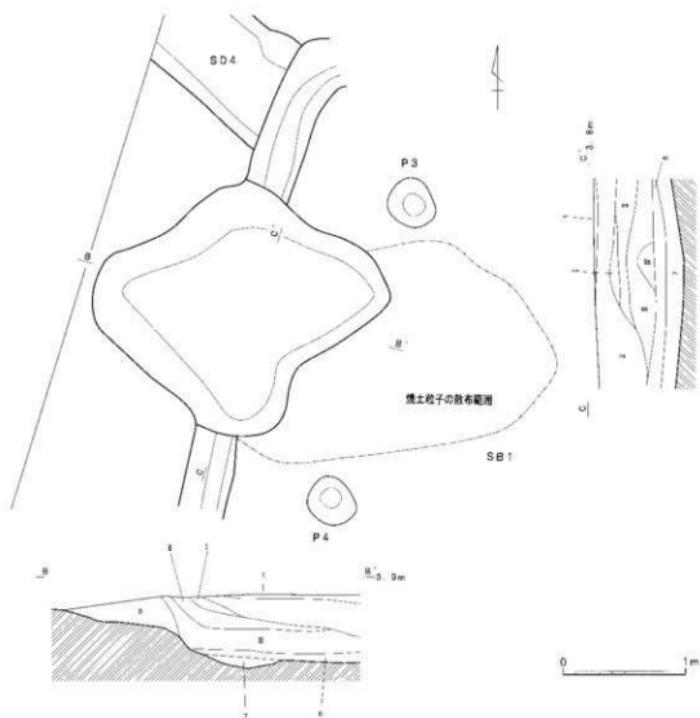
【柱穴】

4本検出された。径34~38cmの円形を呈し、深さは31~33cmを測る。覆土はしまり、粘りがともにやや弱い黒褐色土(10YR3/1)が主である。

【竈】

住居址の西辺のほぼ中央に構築されていた。心材等ではなく、粘土のみの構築であったため、やや崩れた状態で確認された。現存部分は長さ2.24m、幅2.06mである。竈内で須恵器が1点検出されている。

竈の覆土は、I層は灰黄褐色土(10YR4/2)で、しまりが非常に強く粘りは強い。II層は黒色土(10YR2/1)で、しまりが強く粘りはやや弱い。III層は灰黄褐色土層(10YR4/2)で、微量の炭化物を



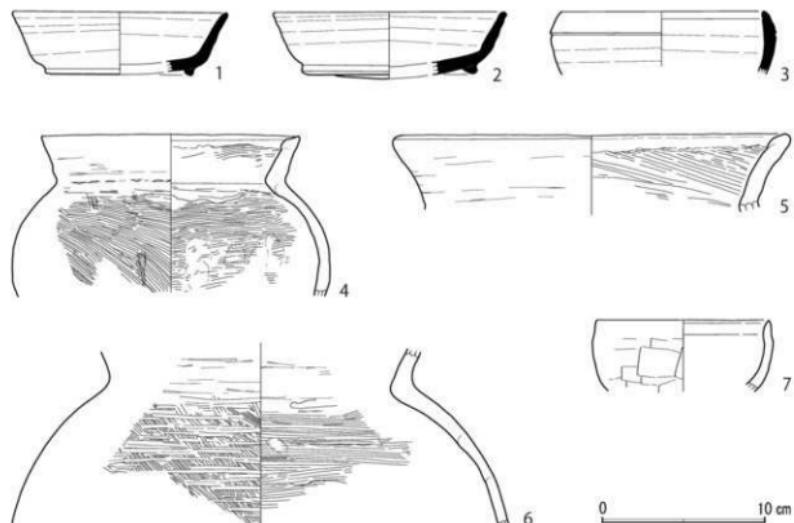
第7図 第1号住居址竪実測図

含んでいる。しまりが非常に強く粘りはやや強い。IV層は赤褐色土（5YR4/6）で、しまりが強く粘りはやや弱い、竪の中心部である。1・2・5・6・7層は住居址の覆土に相当し、7層は住居址内で検出された周溝の覆土である。

【出土遺物】

古墳時代後期～奈良時代の土器が出土している。ほぼ破片資料であることから、図化できたものは7点である。土器は主に西側で出土している。覆土1層出土のもの（4・5）、床面付近出土のもの（6・7）、竪出土のもの（3）に分けられる。

1～3は須恵器である。1・2は壺で、いずれも口縁部から底部まで残存しており、ともに右口クロ成形である。3は邊の口縁部である。4～7は土器である。4～6は甕で、4は口縁部から胴部、5は口縁部、6は頸部から胴部にかけて残存しており、4・5の口縁端部は肥厚する。6の頸部は内外面ともヨコナデが施され、「く」の字の屈曲を有し、胴部内面はハケメ、外表面はハケメ後横位ヘラミガキが認められる。4～6は調整、胎土などが奈良時代の駿東甕の特徴を表している。7は壺で、口縁部から体部が残存する。



第8図 第1号住居址出土土器実測図

(2) 溝状遺構

溝状遺構は5本検出され、調査区南側の斜面で3本、北側のほぼ平地となる区域で2本確認された。いずれも調査区域外に延びるため、全長が不明である。第4号溝状遺構は第1号住居址を切っているため、少なくとも住居址の時期よりは新しいものだが、覆土中の出土遺物は古墳時代後期のものが多い。

第1号溝状遺構（第9図）

調査区の南側の斜面で検出された。調査区西端から南端に向かって直線状に延び、調査区の南端で第4号土坑に切られている。端部がいずれも確認できなかったため、全長は不明である。第2・3号溝状遺構とほぼ平行して延びている。

【規模】

長さ 5.76m × 幅 0.82m × 深さ 0.31m（残存部分）

【覆土】

1層は黒褐色土（10YR2/2）で、径5mmの赤褐色（5YR4/6）スコリアを30%含み、しまりが強く、粘りはやや強い。2層は暗褐色（10YR3/3）の径2~10mm前後の砂質土。しまり、粘りはともに弱い。

第2号溝状遺構（第9図）

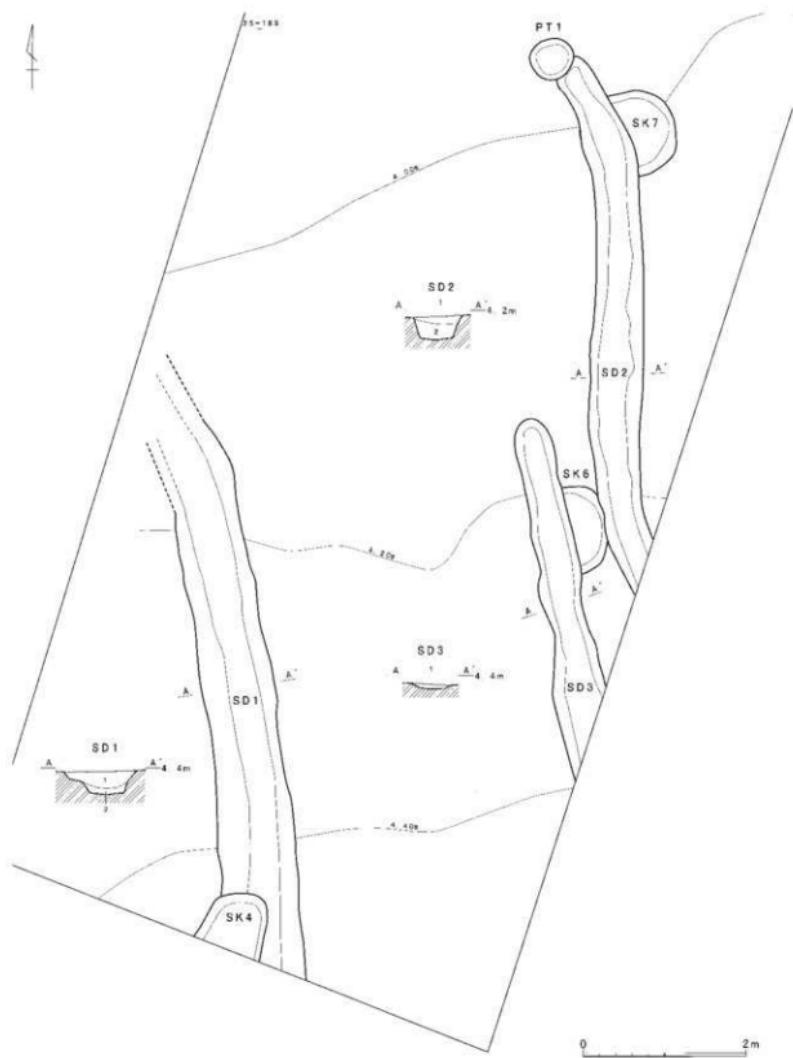
調査区の南側の斜面で検出された。南北方向に延びるが、第7号土坑と切り合っている付近で西方向へ緩やかに折れる。南端部が調査区域外に延びるため全長は不明である。北端部が第1号ピットを切っており、南側で第6号土坑に切られている。第1・3号溝状遺構とほぼ平行して延びている。

【規模】

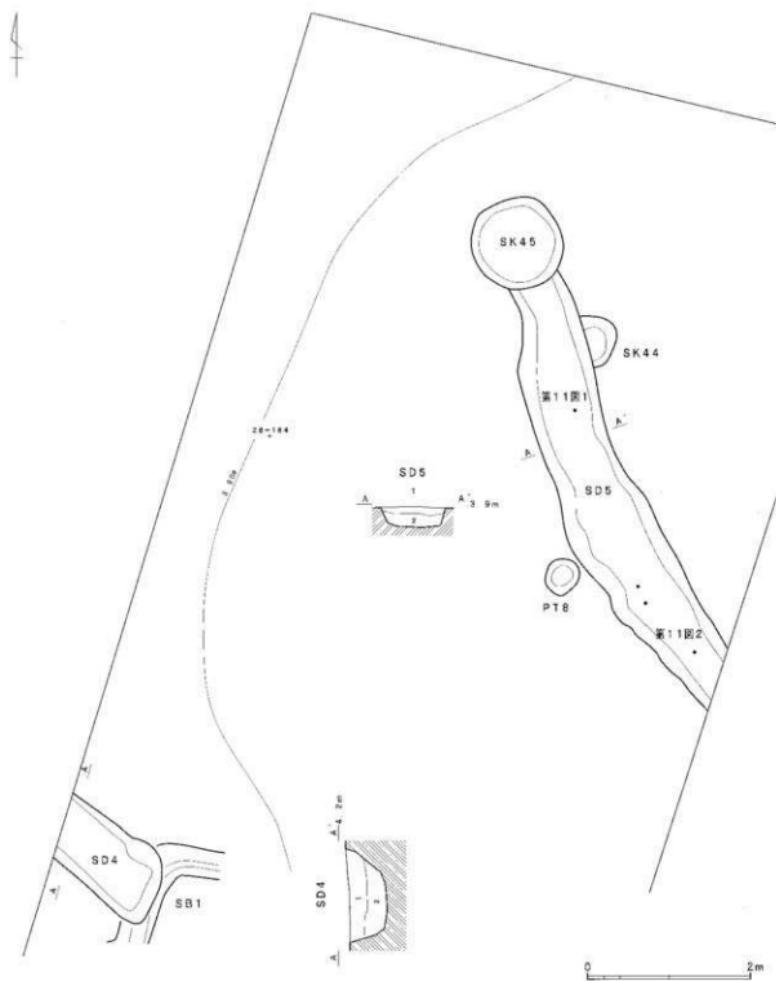
長さ 5.77m × 幅 0.55m × 深さ 0.28m（残存部分）

【覆土】

1層は黒褐色土（10YR3/2）で、径5mmの赤褐色（5YR4/6）スコリア・径2~5mmの小礫を20%含



第9図 第1～3号溝状造構実測図



第10図 第4・5号溝状遺構実測図

む。しまりが強く、粘りはやや強い。2層は黒褐色土(10YR3/1)で、径2~10mm前後的小礫を30%含む。しまり、粘りはともに弱い。

第3号溝状遺構（第9図）

調査区南側の斜面で検出された。南北方向に第1・2号溝状遺構とほぼ平行に延びている。南端部は調査区域外に延びるため全長は不明である。やや中央部を第6号土坑に切られている。

【規模】

長さ 3.06m × 幅 1.12m × 深さ 0.55m (残存部分)

【覆土】

1 層はしまり、粘りがともに強い黒褐色土 (10YR3/2) で、径 5mm の赤褐色 (5YR4/6) スコリア・径 2~5mm の小礫を 20% 含む。

第4号溝状遺構 (第 10 図)

調査区やや北側で検出された。東西方向に延び、第1号住居址を切っている。西端部は調査区域外に延びるため全長は不明である。

【規模】

長さ 1.03m × 幅 0.88m × 深さ 0.56m (残存部分)

【覆土】

1 層は黒褐色土 (10YR3/2) で、径 5mm の赤褐色 (5YR4/6) スコリア・径 1~5mm の小礫を 20%、径 2~5mm の灰白色 (2.5Y8/2) バミスを微量に含む。しまり、粘りがともにやや強い。2 層は黒褐色土 (10YR2/2) で、径 5mm の赤褐色 (5YR4/6) スコリアを 2%、径 1~2mm の小礫を 2% 含む。しまりがやや強く、粘りは強い。

第5号溝状遺構 (第 10・11 図)

調査区北側で検出された。北から南東へ延びている。北端は第45号土坑に切られ、南端は調査区域外へ延びるため全長は不明である。第45号土坑の南東側に位置する第44号土坑に溝の一部が切られている。

【規模】

長さ 4.99m × 幅 1.03m × 深さ 0.24m (残存部分)

【覆土】

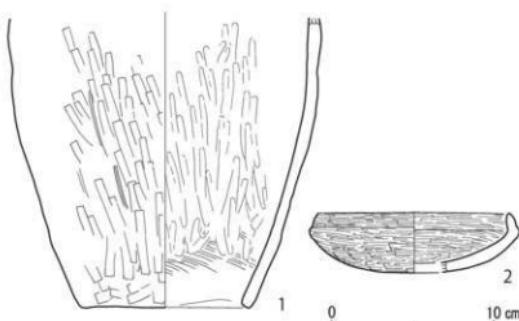
1 層は黒褐色土 (10YR2/2) で、径 1~2mm の赤褐色 (5YR4/6) スコリアを 2%、径 1~2mm の小礫を 20% 含む。しまりがやや強く、粘りは強い。2 層は黒褐色土 (5YR2/1) で、径 2~5mm の小礫を 50% 以上含む。しまりがやや弱く、粘りはやや強い。

【出土遺物】

古墳時代後期の土器が出土している。1 は甌、2 は土師器の壺で、甌は胴部から底部が残存しており、底部には整形による坦面が認められる。壺は口縁部から底部まで残存し、内外面に回転ヘラミガキが施されている。

これらの土器はいずれも本溝状遺構の層位 1 層で確認した。

甌の一部は第1号住居址でも出土している。



第 11 図 第 5 号溝状遺構出土土器実測図

(3) 土坑

土坑は44基検出された。主に調査区の中央から北側に広がる平地に集中して確認されており、南側に広がる斜面にやや点在する。

第1号土坑（第12図）

調査区南側で検出された。西端で検出されているため、全容が不明だが残存部分から平面形は橢円形と考えられる。残存部分は長径99cm、短径41cm、深さ15cmを測る。断面形はやや上方が開く浅い逆台形を呈する。

覆土はしまりが強く、粘りのやや強い黒褐色土（10YR2/2）で、径5mmの赤褐色（5YR4/6）スコリアを30%含む。

第2号土坑（第12図）

調査区の南東端付近で検出された。平面形は円形で、長径95cm、短径94cm、深さ31cmを測る。断面形は上方に立ち上がったのち、やや開く。主軸方向はN-38°-Eを測る。

覆土は2層で構成され、1層は黒褐色土（10YR2/2）で、径5mmの赤褐色（5YR4/6）スコリアを30%含み、しまりが強く、粘りはやや強い。2層は黒褐色土（10YR3/1）で、径1~5mmの小礫を30%含み、しまり、粘りはともにやや弱い。

第3号土坑（第12図）

調査区の南側に位置する第1・3号溝状遺構の間で検出された。平面形は円形で、長径93cm、短径92cm、深さ19cmを測る。断面形は箱形を呈したのち、やや上方が開く。主軸方向はN-50°-Wを測る。

覆土は2層で構成され、1層は黒褐色土（10YR2/2）で、径5mmの赤褐色（5YR4/6）スコリアを30%含み、しまりが強く、粘りはやや強い。2層は黒褐色土（10YR3/1）で、径1~5mmの小礫を30%含み、しまりがやや弱く、粘りはやや強い。

第4号土坑（第12図）

調査区の南端で検出された。南半分は調査区域外となっているため全容は不明である。第1号溝状遺構を切っており残存部分の規模は長径71cm、短径40cm、深さ25cmを測る。断面形はやや開いたのち、直線状に立ち上がる。

覆土は2層で構成され、1層は黒褐色土（10YR2/2）で、径5mmの赤褐色（5YR4/6）スコリアを30%含み、しまりが強く、少々粘りがある。2層は黒褐色土（10YR3/2）で、径5mmの赤褐色（5YR4/6）スコリア・径2~5mmの小礫を20%含む。しまりが強く、粘りがやや強い。

第5号土坑（第12図）

調査区の南側で第9号土坑と隣接して検出された。平面形は橢円形で、長径74cm、短径56cm、深さ10cmを測る。断面形は浅いV字状を呈する。主軸方向はN-85°-Eを測る。

覆土は2層で構成され、1層は黒褐色土（10YR2/2）で、径5mmの赤褐色（5YR4/6）スコリアを30%含み、しまりが強く、粘りはやや強い。2層は暗褐色（10YR3/3）の径2~10mm前後の砂質土。しまりが弱く、微妙に粘りがある。

第6号土坑（第12図）

調査区南側で検出された。第2・3号溝状遺構を切っている。平面形はほぼ円形で、長径108cm、短径96cm、深さ7cmを測る。断面形は浅い皿状を呈し、北寄りの底部がやや深くなっている。主軸方向はN-12°-Wを測る。

覆土はしまり、粘りがともにやや強い黒褐色土（10YR3/2）で、径5mmの赤褐色（5YR4/6）スコリア・径2~5mmの小礫を20%含む。

第7号土坑（第12図）

調査区南側で検出された。第2号溝状遺構を切っている。平面形は楕円形で、長径121cm、短径105cm、深さ9cmを測る。断面形は浅い皿状を呈し、主軸方向はN-73°-Wを測る。

覆土はしまり、粘りがともにやや強い黒褐色土（10YR3/2）で、径5mmの赤褐色（5YR4/6）スコリア・径2~5mmの小礫を20%含む。

第8号土坑（第12図）

調査区南側で検出された。平面形は円形で、長径79cm、短径74cm、深さ17cmを測る。断面形はやや上方が開く逆台形を呈する。主軸方向はN-8°-Wを測る。

覆土は2層で構成され、1層は黒褐色土（10YR2/2）で、径5mmの赤褐色（5YR4/6）スコリアを30%含み、しまりが強く、粘りはやや強い。2層は黒褐色土（10YR3/2）で、径5mmの赤褐色（5YR4/6）スコリア・径2~5mmの小礫を20%含む。しまり、粘りがともにやや強い。

第9号土坑（第12図）

調査区の南側で検出された。第5・16号土坑と隣接している。平面形は不整な楕円形で長径105cm、短径94cm、深さ14cmを測る。断面形は浅い皿状を呈し東寄りがやや深くなっている。主軸方向はN-33°-Eを測る。

覆土は2層で構成され、1層は黒褐色土（10YR2/2）で、径5mmの赤褐色（5YR4/6）スコリアを30%含み、しまりが強く、粘りはやや強い。2層は暗褐色（10YR3/3）の径2~10mm前後の砂質土。しまり、粘りはともに弱い。

第10号土坑（第12図）

調査区中央よりやや南側の東端で検出された。東半分は調査区域外となっているため、全容は不明である。残存部分の規模は長径114cm、短径61cm、深さ17cmを測る。断面形は箱形を呈する。

覆土はしまり、粘りがともにやや強い黒褐色土（10YR3/2）で、径5mmの赤褐色（5YR4/6）スコリア・径2~5mmの小礫を20%含む。

第11号土坑（第12図）

調査区の中央からわずかに南側の東端で検出された。大部分が調査区域外となっているため、全容は不明である。残存部分の規模は長径56cm、短径14cm、深さ28cmを測る。断面形はやや逆台形を呈する。

覆土はしまりが強く、粘りがやや強い黒褐色土（10YR2/2）で、径5mmの赤褐色（5YR4/6）スコリアを30%含む。

第12号土坑（第12図）

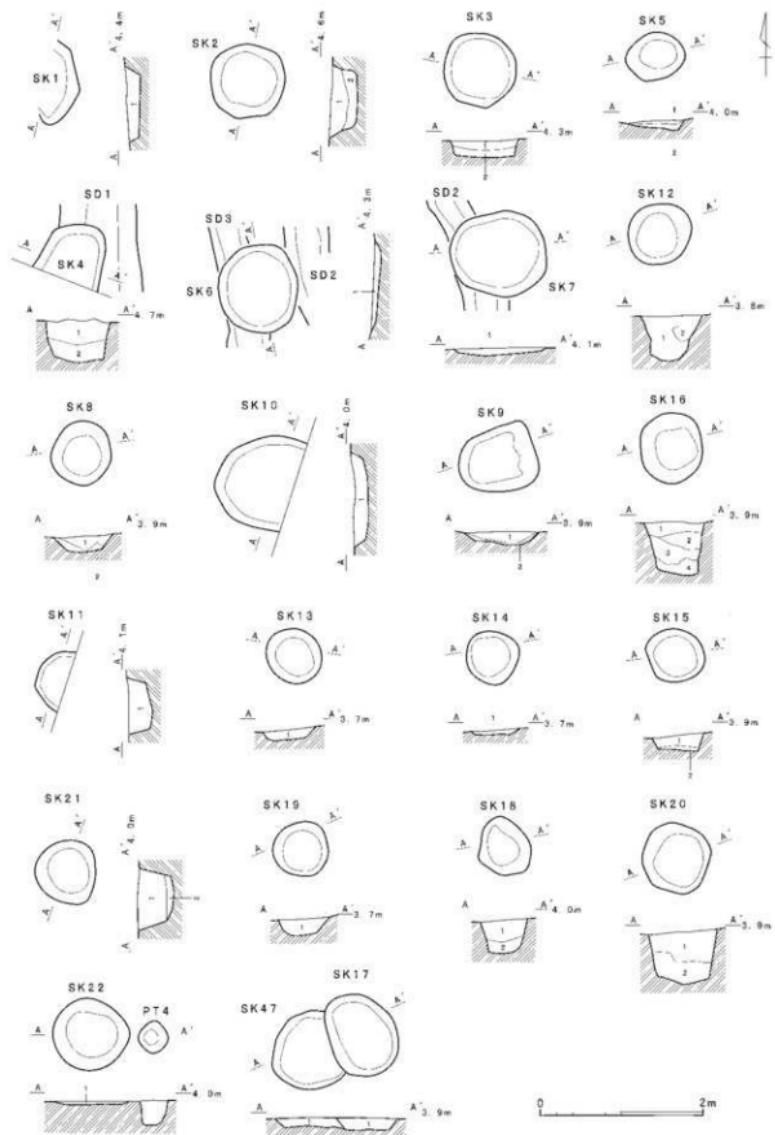
調査区中央よりやや南側で検出された。平面形はほぼ円形で、長径は81cm、短径は73cm、深さは53cmを測る。断面形は皿状の両端が上方に立ち上がったのち、さらに上方が開く。主軸方向はN-56°-Wを測る。

覆土は2層で構成され、1層は黒褐色土（10YR2/2）で、径5mmの赤褐色（5YR4/6）スコリアを30%含み、しまりが強く、粘りはやや強い。2層はにぶい黄褐色（10YR4/3）の径2~10mm前後の砂質土。しまり、粘りはともにやや弱い。

第13号土坑（第12図）

調査区中央付近で検出された。平面形はほぼ円形で、長径72cm、短径64cm、深さ11cmを測る。断面形は上方が開く逆台形を呈する。主軸方向はN-44°-Wを測る。

覆土はしまりが強く、粘りがやや強い黒褐色土（10YR2/2）で、径5mmの赤褐色（5YR4/6）スコリアを30%含む。



第12図 土坑実測図(1)

第14号土坑（第12図）

調査区のほぼ中央で検出された。平面形は円形で、長径68cm、短径64cm、深さ6cmを測る。断面形は浅い皿状を呈し、東寄りで若干深くなる。主軸方向はN-27°-Wを測る。

覆土はしまりが強く、粘りがやや強い黒褐色土（10YR2/2）で、径5mmの赤褐色（5YR4/6）スコリアを30%含む。西側に小礫が多く混じる。

第15号土坑（第12図）

調査区中央付近で検出された。平面形はほぼ円形で、長径74cm、短径62cm、深さ19cmを測る。断面形は逆台形を呈する。主軸方向はN-74°-Wを測る。

覆土は2層に分層され、1層は黒褐色土（10YR2/2）で、径5mmの赤褐色（5YR4/6）スコリアを30%含み、しまりが強く、粘りがやや強い。2層は暗褐色（10YR3/3）の径2~10mm前後の砂質土。しまり、粘りがともに弱い。

第16号土坑（第12図）

調査区南東側で検出された。第9号土坑と隣接している。平面形はほぼ円形で、長径88cm、短径75cm、深さ62cmを測る。断面形はやや深い逆台形を呈する。主軸方向はN-3°-Wを測る。

覆土は4層で構成され、1層は黒褐色土（10YR2/2）で、径5mmの赤褐色（5YR4/6）スコリアを30%含み、しまりが強く、粘りがやや強い。2層は黒褐色土（10YR3/1）で、径1~5mmの小礫を30%含み、しまり、粘りはともにやや弱い。3層は黒色土（10YR2/1）で、径1~2mmの小礫を30%含み、しまりがやや強く、粘りはやや弱い。4層は黒色土（7.5YR2/1）で、径1~2mmの赤褐色（5YR4/6）スコリアを5%、径1~2mmの小礫を10%含む。しまり、粘りともにやや強い。

第17号土坑（第12図）

調査区北側で検出された。第47号土坑を切っている。平面形は楕円形で、長径104cm、短径84cm、深さ13cmを測る。断面形は浅い逆台形を呈する。主軸方向はN-27°-Wを測る。

覆土はしまり、粘りがともにやや強い黒褐色土（10YR3/2）で、径5mmの赤褐色（5YR4/6）スコリア・径2~5mmの小礫を20%含む。

第18号土坑（第12図）

調査区の中央からやや北東側で検出された。第20号土坑と隣接している。平面形は不整な楕円形で、長径75cm、短径61cm、深さ39cmを測る。断面形はやや深い逆台形を呈する。主軸方向はN-27°-Wを測る。

覆土は2層に分層され、1層は黒褐色土（10YR2/2）で、径5mmの赤褐色（5YR4/6）スコリアを30%含み、しまりが強く、粘りがやや強い。2層は黒褐色土（10YR3/2）で、径5mmの赤褐色（5YR4/6）スコリア・径2~5mmの小礫を20%含む。しまり、粘りともにやや強い。

第19号土坑（第12図）

調査区中央よりやや北側で検出された。第21・30・31号土坑と隣接する。平面形は円形で、長径70cm、短径68cm、深さ19cmを測る。断面形は逆台形を呈する。主軸方向はN-62°-Eを測る。

覆土は2層に分層され、1層は黒褐色土（10YR2/2）で、径5mmの赤褐色（5YR4/6）スコリアを30%含み、しまりが強く、粘りがやや強い。2層は暗褐色（10YR3/3）の径2~10mm前後の砂質土。しまり、粘りがともに弱い。

第20号土坑（第12図）

調査区中央よりやや北東側で検出された。第18号土坑と隣接している。平面形はほぼ円形で、長径90cm、短径84cm、深さ63cmを測る。断面形は中央部分がやや深くなる逆台形を呈する。主軸方向はN-16°-Wを測る。

覆土は2層に分層され、1層は黒褐色土(10YR2/2)で、径5mmの赤褐色(5YR4/6)スコリアを30%含み、しまりが強く、粘りがやや強い。2層は黒褐色土(10YR3/1)で、径1~5mmの小礫を30%含み、しまり、粘りがともにやや弱い。

第21号土坑(第12図)

調査区の中央よりやや北東側で検出された。平面形は円形で、長径79cm、短径75cm、深さ43cmを測る。断面形は逆台形を呈する。主軸方向はN-25°-Wを測る。

覆土は2層に分層され、1層は黒褐色土(10YR2/2)で、径5mmの赤褐色(5YR4/6)スコリアを30%含み、しまりが強く、粘りがやや強い。2層は黒褐色土(10YR3/1)で、径1~5mmの小礫を30%含み、しまり、粘りがともにやや弱い。

第22号土坑(第12図)

調査区中央よりやや北東側で検出された。第4号ピット、第19・21号土坑と隣接する。平面形はほぼ円形で、長径95cm、短径88cm、深さ3cmを測る。断面形は非常に浅い皿状を呈する。主軸方向はN-82°-Wを測る。

覆土はしまりが強く、粘りがやや強い黒褐色土(10YR2/2)で、径5mmの赤褐色(5YR4/6)スコリアを30%含む。

第23号土坑(第13図)

調査区中央の北側で検出された。第24号土坑と隣接している。平面形は円形で、長径71cm、短径65cm、深さ20cmを測る。断面形は浅い箱形を呈する。主軸方向はN-54°-Eを測る。

覆土はしまりがやや強く、粘性が強い黒褐色土(10YR2/2)で、径1~2mmの赤褐色(5YR4/6)スコリアを2%、径1~2mmの小礫を20%含む。

第24号土坑(第13図)

調査区中央の北側で検出された。第23号土坑と隣接している。平面形は円形で、長径75cm、短径70cm、深さ59cmを測る。断面形は長方形を呈する。主軸方向はN-36°-Wを測る。

覆土は2層で構成され、1層は黒褐色土(10YR2/2)で、径5mmの赤褐色(5YR4/6)スコリアを30%含み、しまりが強く、粘りがやや強い。2層は黒褐色土(10YR2/2)で、径1~2mmの赤褐色(5YR4/6)スコリアを2%、径1~2mmの小礫を20%含む。しまりがやや強く、粘りが強い。

第25号土坑(第13図)

調査区の中央からやや北東側の東端部で検出された。第26号土坑に切られている。平面形は不整形で、残存部分の規模は長径58cm、短径56cm、深さ44cmを測る。

覆土は2層で構成され、1層は黒褐色土(10YR2/2)で、径1~2mmの赤褐色(5YR4/6)スコリアを2%、径1~2mmの小礫を20%含む。しまりがやや強く、粘りが強い。2層は黒色土(7.5YR2/1)で、径1~2mmの赤褐色(5YR4/6)スコリアを5%、径1~2mmの小礫を10%含む。しまり、粘りがともにやや強い。

第26号土坑(第13図)

調査区の中央からやや北東側の東端部で検出された。東部分が調査区域外となっていることから全容は不明である。第25号土坑を切っている。残存部分の規模は長径81cm、短径29cm、深さ31cmを測る。断面形はほぼ逆台形を呈する。

覆土はしまりが強く、粘りがやや強い黒褐色土(10YR2/2)で、径5mmの赤褐色(5YR4/6)スコリアを30%含む。

第27号土坑(第13図)

調査区中央よりやや北側で検出された。第28・29号土坑と隣接している。平面形はほぼ円形で、土

坑内部の北側に堀り込みが見られる。長径 118cm、短径 109cm、深さは内部の堀り込みまで含め 37cm を測る。断面形は中段を持つ V 字状を呈し、主軸方向は N-9°-W を測る。

覆土は 2 層で構成され、1 層は黒褐色土 (10YR2/2) で、径 5 mm の赤褐色 (5YR4/6) スコリアを 30% 含み、しまりが強く、粘りはやや強い。2 層は黒褐色土 (10YR2/2) で、径 1~2 mm の赤褐色 (5YR4/6) スコリアを 2%、径 1~2 mm の小礫を 20% 含む。しまりがやや強く、粘りは強い。

第 28 号土坑（第 13 図）

調査区北側に位置する第 1 号住居址のすぐ南側で検出された。平面形はほぼ円形で、長径 109cm、短径 96cm、深さ 15cm を測る。断面形は浅い箱形を呈する。主軸方向は N-18°-W を測る。

覆土は 2 層で構成され、1 层は黒褐色土 (10YR2/2) で、径 5 mm の赤褐色 (5YR4/6) スコリアを 30% 含み、しまりが強く、粘りはやや強い。2 層は黒褐色土 (10YR3/2) で、径 5 mm の赤褐色 (5YR4/6) スコリア・径 2~5 mm の小礫を 20% 含む。しまり、粘りがともにやや強い。

第 29 号土坑（第 13 図）

調査区北側に位置する第 1 号住居址の南側で検出された。第 1 号住居址を切っており、第 28 号土坑とは隣接している。平面形はほぼ円形で、長径 112cm、短径 103cm、深さ 12cm を測る。断面形は箱形を呈し、主軸方向は N-15°-W を測る。

覆土はしまり、粘りがともにやや強い黒褐色土 (10YR3/2) で、径 5 mm の赤褐色 (5YR4/6) スコリア・径 2~5 mm の小礫を 20% 含む。

第 30 号土坑（第 13 図）

調査区中央よりやや北側で検出された。第 31 号土坑と隣接している。平面形はやや梢円形で、長径 112cm、短径 77cm、深さ 34cm を測る。断面形は箱形を呈したあと、上方に開く。主軸方向は N-50°-W を測る。

覆土は 2 層で構成され、1 层は黒褐色土 (10YR2/2) で、径 5 mm の赤褐色 (5YR4/6) スコリアを 30% 含み、しまりが強く、粘りはやや強い。2 層は黒褐色土 (10YR3/1) で、径 1~5 mm の小礫を 30% 含み、しまり、粘りがともにやや弱い。

第 31 号土坑（第 13 図）

調査区中央よりやや北側で検出された。第 30 号土坑と隣接している。平面形は梢円形で、長径 86cm、短径 67cm、深さ 45cm を測る。断面形はやや逆台形を呈し、主軸方向は N-48°-W を測る。

覆土は 3 層で構成され、1 层は黒褐色土 (10YR2/2) で、径 5 mm の赤褐色 (5YR4/6) スコリアを 30% 含み、しまりが強く、粘りはやや強い。2 層は黒褐色土 (10YR3/1) で、径 1~5 mm の小礫を 30% 含み、しまり、粘りがともにやや弱い。3 層は黒色土 (7.5YR2/1) で、径 1~2 mm の赤褐色 (5YR4/6) スコリアを 5% 含み、径 1~2 mm の小礫を 10% 含む。しまり、粘りがともにやや強い。

第 32 号土坑（第 13 図）

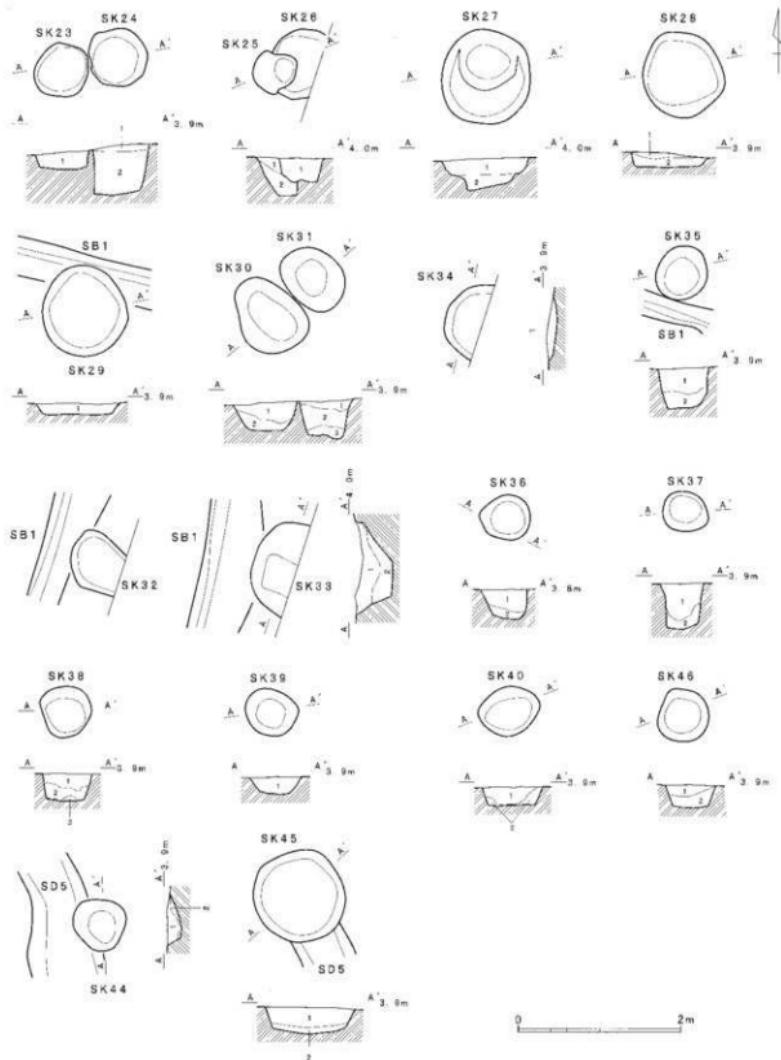
調査区北側に位置する第 1 号住居址の東側で検出された。住居址東辺の南側を切っており、本土坑の東部分が調査区域外となっているため全容は不明である。残存部分の規模は長径 66cm、短径 57cm、深さは 10cm を測る。断面形は浅い皿状を呈する。

覆土はしまり、粘りがともにやや弱い黒褐色土 (10YR3/1) で、径 1~5 mm の小礫を 30% 含む。

第 33 号土坑（第 13 図）

調査区北側に位置する第 1 号住居址の東側で検出された。住居址東辺のほぼ中央を切っており、本土坑の東部分が調査区域外となっているため全容は不明である。残存部分の規模は長径 112cm、短径 44cm、深さ 42cm を測る。断面形はほぼ逆台形を呈する。

覆土は 2 層で構成され、1 层は黒褐色土 (10YR2/2) で、径 5 mm の赤褐色 (5YR4/6) スコリアを 30%



第13図 土坑実測図(2)

%含み、しまりが強く、粘りがやや強い。2層は黒褐色土(10YR3/1)で、径1~5mmの小礫を30%含み、しまり、粘りがともにやや弱い。

第34号土坑(第13図)

調査区北側に位置する第1号住居址の東側で検出された。東部分が調査区域外となっているため全容は不明である。残存部分の規模は長径82cm、短径28cm、深さ10cmを測る。断面形は非常に浅い皿状を呈する。

覆土はしまり、粘りがともに弱い黒褐色土(10YR3/1)で、径1~5mmの小礫を30%含む。

第35号土坑(第13図)

調査区北側に位置する第1号住居址のすぐ北側で検出された。平面形はほぼ円形で、長径69cm、短径61cm、深さ47cmを測る。断面形はややU字形を呈する。主軸方向はN-35°-Eを測る。

覆土は2層で構成され、1層は黒褐色土(10YR2/2)で、径5mmの赤褐色(5YR4/6)スコリアを30%含み、しまりが強く、粘りがやや強い。2層は黒色土(7.5YR2/1)で、径1~2mmの赤褐色(5YR4/6)スコリアを5%、径1~2mmの小礫を10%含む。しまり、粘りがともにやや強い。

第36号土坑(第13図)

調査区北側に位置する第1号住居址のすぐ北側で検出された。平面形はほぼ円形で、長径62cm、短径55cm、深さ34cmを測る。断面形はややU字形を呈する。主軸方向はN-76°-Wを測る。

覆土は2層で構成され、1層は黒褐色土(10YR2/2)で、径5mmの赤褐色(5YR4/6)スコリアを30%含み、しまりが強く、粘りがやや強い。2層は黒色土(7.5YR2/1)で、径1~2mmの赤褐色(5YR4/6)スコリアを5%含み、径1~2mmの小礫を10%含む。しまり、粘りがともにやや強い。

第37号土坑(第13図)

調査区北側に位置する第1号住居址のすぐ北側で検出された。平面形はほぼ円形で、長径57cm、短径49cm、深さ54cmを測る。断面形は深い長方形を呈する。主軸方向はN-72°-Wを測る。

覆土は2層で構成され、1層は黒褐色土(10YR2/2)で、径5mmの赤褐色(5YR4/6)スコリアを30%含み、しまりが強く、粘りがやや強い。2層は黒色土(7.5YR2/1)で、径1~2mmの赤褐色(5YR4/6)スコリアを5%含み、径1~2mmの小礫を10%含む。しまり、粘りがともにやや強い。

第38号土坑(第13図)

調査区の北側で検出された。第5号溝状遺構の南側に隣接している。平面形は円形で、長径63cm、短径59cm、深さ32cmを測る。断面形はほぼ長方形を呈する。主軸方向はN-11°-Wを測る。

覆土は3層で構成され、1層は黒褐色土(10YR2/2)で、径1~2mmの赤褐色(5YR4/6)スコリアを2%、径1~2mmの小礫を20%含む。しまりがやや強く、粘りは強い。2層は黒色土(7.5YR2/1)で、径1~2mmの赤褐色(5YR4/6)スコリアを5%含み、径1~2mmの小礫を10%含む。しまり、粘りがともにやや強い。3層は暗褐色(10YR3/3)の径2~10mm前後の砂質土。しまり、粘りがともに弱い。

第39号土坑(第13図)

調査区の北側で検出された。平面形はほぼ円形で、長径64cm、短径55cm、深さ20cmを測る。断面形は逆台形を呈する。主軸方向はN-54°-Wを測る。

覆土はしまり、粘りがともにやや強い黒褐色土(10YR3/2)で、径5mmの赤褐色(5YR4/6)スコリア・径2~5mmの小礫を20%含む。

第40号土坑(第13図)

調査区の北側で検出された。平面形は梢円形で、長径76cm、短径59cm、深さ22cmを測る。断面形は逆台形を呈する。主軸方向はN-83°-Eを測る。

覆土は2層で構成され、1層は黒褐色土(10YR2/2)で、径1~2mmの赤褐色(5YR4/6)スコリアを2%、

径1～2mmの小礫を20%含む。しまりがやや強く、粘りは強い。2層は暗褐色(10YR3/3)の径2～10mm前後の砂質土。しまり、粘りがともに弱い。

第44号土坑(第13図)

調査区の北端部で検出された。第5号溝状遺構を切っている。平面形は円形で、長径64cm、短径62cm、深さ17cmを測る。断面形はほぼ皿状を呈し、主軸方向はN-71°-Wを測る。

覆土は2層で構成され、1層は黒褐色土(10YR3/2)で、径5mmの赤褐色(5YR4/6)スコリア・径2～5mmの小礫を20%含む。しまり、粘りがともにやや強い。2層は黒褐色土(10YR2/2)で、径1～2mmの赤褐色(5YR4/6)スコリアを2%含み、径1～2mmの小礫を20%含む。しまりがやや強く、粘りは強い。

第45号土坑(第13図)

調査区の北端部で検出された。第5号溝状遺構の端部を切っている。平面形は円形で、長径118cm、短径112cm、深さ32cmを測る。断面形は逆台形を呈する。主軸方向はN-49°-Wを測る。

覆土は2層で構成され、1層は黒褐色土(10YR3/2)で、径5mmの赤褐色(5YR4/6)スコリア・径2～5mmの小礫を20%含む。しまり、粘りがともにやや強い。2層は黒褐色土(10YR2/2)で、径1～2mmの赤褐色(5YR4/6)スコリアを2%含み、径1～2mmの小礫を20%含む。しまりがやや強く、粘りは強い。

第46号土坑(第13図)

調査区の北端部で検出された。第5号溝状遺構の北側に位置する。平面形は円形で、長径68cm、短径64cm、深さ27cmを測る。断面形は逆台形を呈する。主軸方向はN-23°-Wを測る。

覆土は2層で構成され、1層は黒褐色土(10YR3/2)で、径5mmの赤褐色(5YR4/6)スコリア・径2～5mmの小礫を20%含む。しまり、粘りがともにやや強い。2層は黒褐色土(10YR2/2)で、径1～2mmの赤褐色(5YR4/6)スコリアを2%含み、径1～2mmの小礫を20%含む。しまりがやや強く、粘りは強い。

第47号土坑(第12図)

調査区の北側で検出された。第17号土坑に切られている。平面形は残存部分より楕円形と考えられる。残存部分の規模は長径92cm、短径75cm、深さ10cmを測る。断面形は浅い箱形を呈する。

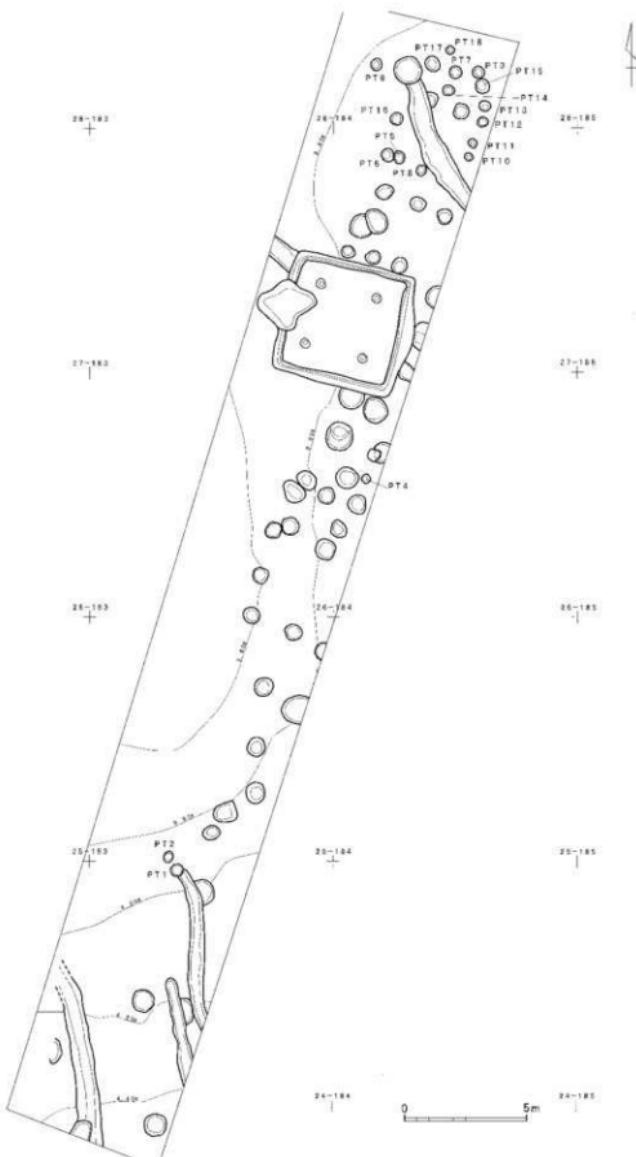
覆土はしまりが強く、粘りがやや強い黒褐色土(10YR2/2)で、径5mmの赤褐色(5YR4/6)スコリアを30%含む。

(4) ピット群(第14・15図)

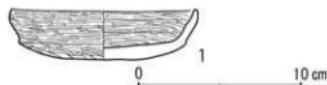
調査区南側に2基、中央付近に1基、北端部に15基の計18基が検出されている。北側のピットは第5号溝状遺構周辺でまとめて確認されたが、規則的な分布は認められない。

調査区南側ではPT1・2が隣接して検出されており、PT1は第2号溝状遺構に切られている。平面形は、PT1は残存部分によりほぼ円形と考えられ、PT2は楕円形を呈する。直径は46～51cm、深さは22cmを測る。調査区の中央付近、第22号土坑の東側でPT4が検出されている。平面形はほぼ円形を呈し、直径は37cm、深さは29cmを測る。調査区北端部ではPT3・PT5～18が検出されている。平面形は円形ないし楕円形で直径は35～63cm、深さは8～29cmを測る。

ピットの覆土は分層できるものがほとんどなく、数基が2層に分けられた。分層されないものと2層に分層されたものの上層の覆土は主に、しまりが強く、やや粘りのある黒褐色土(10YR2/2)であり、径5mmの赤褐色(5YR4/6)スコリアを30%と径3～10mmの小礫を50%含んでいた。2層に分層した際の下層の覆土は上層に比べややしまりがなく、径5mmの赤褐色(5YR4/6)スコリアと径1～5mmの小礫を20%含む黒褐色土(10YR2/2)である。



第14図 ピット全体図



第15図 第3号ピット出土土器実測図

【出土遺物】

PT3において古墳時代後期の土師器が出土している。底部がやや丸底で回転ヘラミガキ、回転ナデで調整しており、黒色処理が施される。



第16図 遺構外出土土器

(5) 遺構外遺物（第16図）
縄文時代後期の縄文土器の破片1点と弥生時代中期の弥生土器の破片1点が出土した。弥生土器は住居址内で出土したが、明らかに時代に遅れが見られることから遺構外遺物の扱いとした。

1は縄文時代後期前葉の外反する鉢形土器である。

口端に突起を設け、口縁外側に縦方向の刻みを巡らす。内面は調整によって滑沢を帯びている。2は東遠江が主体的な分布圏となる白岩式（弥生時代中期後葉）の壺形土器と考えられる。櫛状工具による波状文を特徴とする。裏面には浅いハケメが認められ、胎土には黒雲母が含まれている。

第1表 出土土器観察表

番号	器種	出土地点	遺物No	口径 器高 底径	色調・残存部 位	形態の特徴	手法の特徴	X座標 Y座標 Z座標
第8回 1	須恵器 坏	S81	—	(13.0) (3.8) (8.8)	7.5YRS/1 褐色 口縁部～底部	やや外反して立ち上がる。	右口クロ成形、内外面回転ヨコナデ 貼付高台	— — —
第8回 2	須恵器 坏	S81	—	(13.9) (4.8) (10.0)	2.5Y6/2 灰黄色 口縁部～底部	外傾して立ち上がる。底部が高台より突出 すると思われる。	右口クロ成形、内外面回転ヨコナデ 貼付高台	— — —
第8回 3	須恵器 甕	S81	17	(12.4) (3.6) —	10YRS/2 灰黄褐色 口縁部	口縁部は内済して立ち上がる。	口クロ成形、外面自然絞糸 外面に沈線あり	-96578414 25738.370 3.202
第8回 4	甕	S81	13	(15.8) — —	5YR4/2 灰褐色 口縁部～胴部	くの字状を呈し、口縁部は外傾して立ち上 がる。口縁端部はやや肥厚する。上端は凹 状の凹面を有する。胴部は内済する。	口縫部内面ハケメ後ヨコナデ、口縫部 外面ヨコナデ、胴部内外面ハケメ	-9657.616 25740.498 3.851
第8回 5	甕	S81	14	(23.5) (4.5) —	5YR4/2 灰褐色 口縁部	外傾して立ち上がり、嘴部が内側に肥厚 する。	内面ハケメ後ヨコナデ、外面ヨコナデ 内外面ヨコナデ、煤付巻	-96577.079 25738.618 3.753
第8回 6	甕	S81	18	— (11.2) —	5YR4/3 にぶい赤褐色 頭部～胴部	胴部は内済し、嘴部は「く」の字状に屈曲 する。	頭部内外面ヨコナデ、頭部内面ヘラミ ガキ、輪錐器、指頭压痕、頭部外側ハ ケメ後ヘラミガキ	-96575.960 25740.116 3.250
第8回 7	坏	S81	15	(12.4) (3.6) —	5YR6/6 橙色 口縁部～底部	体部は内済し、口縁部は外反して開く。	内面・口縫部外面ヨコナデ、体部外面 ハケメ 内面ともやや磨滅	-96575.819 25739.777 3.270
第11回 1	甕	S05 S81	12	— (17.8) (10.2)	7.5YRS/3 にぶい褐色 頭部～底部	頭部はやや内済して立ち上がり、頭部上半 部で垂直になる。底部は調整による坦面を有 する。	内面縦位ヘラミガキ、内面下位ハケメ 下端ヘラケズリ、外側ヘラケズリ	-96569.691 25743.757 3.869
第11回 2	坏	S05	10	(11.7) — —	7.5YRS/1 褐色 口縁部～底部	体部は緩やかに内済して立ち上がった後、 縫を持つて口縁部は内済する。	口クロ整形、内外面回転ヨコナデ後 回転ヘラミガキ、底部外側ヘラクズリ、 黒色処理（内外面）	-96572.663 25745.230 3.829
第15回 1	坏	PT3	—	11.2 3.1 4.8	5YR4/3 にぶい赤褐色 口縁部～底部	浅い丸底の底部から内済して立ち上がる。 縫を持つて外傾して立ち上がった後、口縫	ロクロ整形成、口縫部内外面回転ヨコナデ 後回転ヘラミガキ、底部外側ヘラクズリ、 黒色処理（内外面）	— — —

第IV章 調査の成果

本遺跡は、富士川河口から狩野川河口の間に形成された千本砂礫州上に形成されている。調査区付近の標高は 3.5 m ~ 4.4 m で、南から北に向かって緩やかに下降している。この千本砂礫州は約 8000 年前に堆積が始まり、3 期にわたる形成史があったとされているが（松原 1995）、本遺跡は約 2000 年前に形成された最も新しい砂礫州Ⅲ上に立地している。

当時この砂礫州の北側には、田子の浦付近で開口する汽水域が広がっており、本遺跡をはじめとする古墳時代～奈良時代にかけての集落は、砂礫州の北側斜面の狭い範囲に東西に展開している。

今回の調査は南北約 48m、東西約 7m とわずかな範囲であったが、住居址 1 軒、溝状遺構 5 本、土坑 44 基、ピット 18 基を検出した。本遺跡の住居址は長軸が 6.4 m と比較的大形であり、その形態も古墳時代後期の特徴を示しているが、床面付近で奈良時代初頭の特徴を示す駿東甕の破片もいくつか出土している。詳細な時期については、隣接する中原遺跡で行われた発掘調査の整理作業の結果を待って再検討したい。

当地域においても古墳時代後期には、住居址内に竈を有するようになる。竈は北側に位置するものが多く、東側のものがそれに続くが、本遺跡での竈は西側で検出されている。本遺跡第 1 次調査において検出された住居址内においても、古墳時代・奈良時代の時期を問わず竈を西側に有するものが主体となる状況が認められている。本遺跡よりもさらに西側の砂礫州上に位置する下道遺跡（古墳時代後期）では、竈は北側に配されていた。こうした状況について第 1 次調査の報告書では、海岸部という立地条件ではなく周辺地域と異なる局地的な風向きへの対応と考えており（鶴田 1998 p.93）、本遺跡でも同様に対応していたものと考えられる。

また、溝状遺構の覆土中からは古墳時代後期の土器が多数出土しているが、検出面はより上位にあり、住居址よりも新しい時期のものであると考えられる。住居址と同様に時期を確定することはできないが、仮に住居址の時期をその特徴から古墳時代後期とすれば、溝状遺構の時期は奈良時代初頭を前後する時期となろう。

本遺跡の東側で行われた第 1 次調査では、古墳時代後期の住居址 9 軒、奈良時代後期の住居址 8 軒が確認されている。出土遺物の中には奈良時代前期まで遡る可能性があるものが認められるが、少なくとも調査区内においては、奈良時代前期に若干の断絶があったものと考えられる。

いっぽう本調査区の西側に広がる中原遺跡は、整理途上にあるため詳細は不明であるが、主に古墳時代後期～奈良時代にかけて連続的に集落が営まれており、またこれらの住居址は調査範囲内において大きな偏りなく分布している。中原遺跡の東限（本書第 2 図）については、明確な根拠がなく、鳥沢遺跡との間では断続的ながら、現在でも土器類の散布が認められる。したがって古墳時代後期には、中原遺跡から本遺跡第 1 次調査区にかけて、東西約 1 km に及ぶ集落が形成されていたものと考えられる。

狩野川河口以西の沼津市西部における同時期の主要な遺跡としては、叶遺跡・東畠毛遺跡・鳥沢遺跡・中原遺跡・下道遺跡などを挙げることができるが、これらはいずれも千本砂礫州上に立地している。ところが、浮島沼を挟んだ対岸の愛鷹山南麓では、本遺跡と同時期の集落はほとんど存在しない。

しかし弥生時代後期から古墳時代初頭までは、愛鷹山南麓に多くの集落が確認されており、植出遺跡・植出北遺跡・北神馬土手遺跡・神馬土手遺跡・中見代第 1 遺跡・八兵衛洞遺跡・八兵衛屋敷遺跡など、比較的大規模な集落が標高 50 m ~ 200 m 付近にかけての山麓に集中している。

弥生時代後期から古墳時代中期には、黄瀬川起源の砂礫層が沼津市北東部～東部を中心に形成した低位の台地上にも集落が営まれるようになる。拠点的集落としては沢田遺跡・御幸町遺跡・藤井原遺跡があり、さらに豆生田遺跡・三芳町遺跡・本田町遺跡・双葉町遺跡などを挙げることができる。

しかし古墳時代後期になると、愛鷹山南麓ではまとまった集落は確認されなくなる。古墳時代後期～奈良・平安時代の遺跡としては、これまで指摘してきた千本砂礫州上の諸遺跡や、狩野川河口近くの千本遺跡、沼津駅北側に広がる上ノ段遺跡、黄瀬川右岸の下石田原田遺跡などがあり、拠点的集落は古代東海道からさして距離を置かない場所に立地している。

ところで、現在の沼津市内では、古墳時代中期までに千本砂礫州上で神明塚古墳、愛鷹山麓東部では子ノ神古墳・長塚古墳の計3基の前方後円墳と、前方後方墳である高尾山古墳が築かれた。古墳時代後期には、6世紀末から7世紀にかけて愛鷹山南麓、神明塚古墳周辺の千本砂礫州上に小形の円墳が密集して群集墳を形成する。群集墳は愛鷹山南麓で特に多く、石川古墳群で約150基・井出古墳群で約15基・根古屋古墳群で約20基以上が確認されている。これらの古墳は戦後の開墾や天地返しなどで、未調査のまま破壊されたものも多く、その総数は1000基を超えると推定されており、愛鷹山南麓は静岡県のみではなく、東海地方においても有数の群集墳盛行地域となっている。

愛鷹山麓には古墳時代後期に属する集落は少なく、群集墳の被葬者の所属する集団、またその経済的基盤が問題となってきた。しかしこれまで述べてきたように、鳥沢遺跡や最近調査された中原遺跡など、浮島沼を挟んだ対岸の千本砂礫州上には、該期の集落が東西に連続している。これらの集落から北方を望むと、ラグーンの北岸となる愛鷹山の山裾から山麓にかけて、無数の古墳が密集している光景があつたのである。

鶴田晴徳 1998『鳥沢遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書 66

松原彰子 1995『下道遺跡周辺の自然環境変遷』『下道遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書 57 p.103-107

写 真 図 版



調査区全景



第1号住居址完掘状況



第1号住居址床面焼土粒子の散布範囲



第 1 号住居址竪断面



第 1 号住居址竪遺物出土状況



第 2 号溝状遺構完掘状況



第 3 号溝状遺構完掘状況



第 5 号溝狀遺構遺物出土狀況



第 5 号土坑完掘狀況

P L. 6



第 17 • 47 号土坑完掘状况



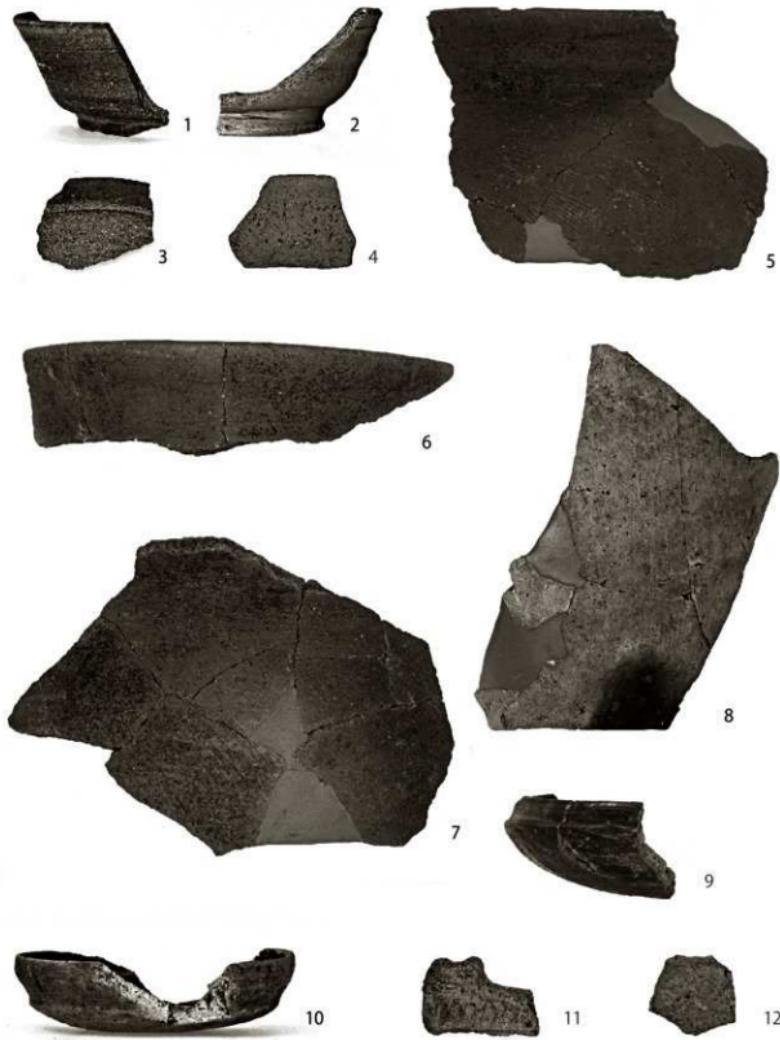
第 27 号土坑完掘状况



北壁遠景



西壁遠景



1~7 第1号住居址出土土器
10 第3号ピット出土土器

8・9 第5号溝状遺構出土土器
11・12 遺構外出土土器

報告書抄録

沼津市文化財調査報告書 第103集
鳥沢遺跡第2次発掘調査報告書

平成23年12月28日 印刷
平成23年12月28日 発行

編集／沼津市教育委員会
発行／沼津市教育委員会
沼津市御幸町16番1号
TEL (055) 931-2500㈹
印刷／みどり美術印刷株式会社